【先週のメッセージより】

「主に立ち返る」 *Ⅰ列王記18章*

●いつまでどっちつかずでいるのか？
バアルか、主か、決めなさい！

人々は偶像礼拝を強いたアハブ王とイゼベルを真の神以上に恐れていたため、エリヤの「いつまで！」の訴えに尻込みした。しかしそれだけでなく、彼ら自身、心の中の偶像礼拝をやめる決意ができていなかったため、干ばつによって苦しめられながらも、尚、神に立ち返ろうとしなかった。

●偶像礼拝が無能なその正体を現わす時

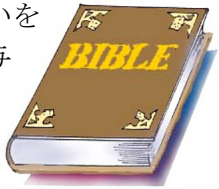
神の裁きの時が来た。バアルとヤーウェのどちらが火を持って答えるか、というコンテストが行なわれたのである。合計850人のバアル、アシェラの預言者に対するのは、エリヤ一人であったが、豊饒、繁栄、楽しみと喜びを約束するバアルは結局、答えなかった。世の様々な教えや哲学、流行が充実感や喜びを約束しても、最終的には人間の根本的な必要を満たさないのと同じである。

●私たちの壊れた祭壇を築き直す時です

クリスチャンもその歩みの中で、偶像礼拝に逆戻りし、主への熱心を失うことがある。しかし偶像礼拝が心の渇きを癒さないことに気がついたなら、すかさず、真の神に立ち返り、神を礼拝するために、壊れた祭壇を築き直そう。その祭壇とは御言葉を読み、御前に祈ること、そして、何よりも自分自身を生きた供え物として神にささげることである。生ける神は私たちが御霊に満ちて真心からささげる礼拝には確実に答えて下さる。

●偶像を捨てる・・・ ***「むさぼりを殺してしまいなさい。」コロサイ3：5***

私たちの悔い改めには、偶像礼拝を捨て去ることが伴うべきである。バアルの預言者、アシェラの預言者をすべて殺すことは恐ろしい光景であったことだろう。生かしておいても、という思いも働いたかも知れないが、悪魔の策略は「これくらい残しておいてもいいのでは」という思いを私たちに与えることである。御霊が与えてくださる剣により、私たちの内なる偶像をたたき壊していこう。容赦してはならない。■



【今週の暗唱聖句】イザヤ４１：１０

「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」

このイザヤ書41:10は、多くの人に最も親しまれている御言葉の一つであろう。天地万物を造られた主、慰めと励まし、正義と愛とに満ちた方が共にいて下さる。世界中で最も強い方を味方にしているなら、いったい、私たちは何を恐れる必要があろうか。ところで、クリスチャンは、弱いのであろうか。それとも強いのであろうか。「主我を愛す、主は強ければ、我弱くとも、恐れはあらじ」という歌がありますが、覚えておきたいことは、主は私たちが「いつまでも弱いままでいること」を願ってはおられない、ということです。

クリスチャンは強くならなければならないのです。その強さとは、誘惑や試練に対する強さ、神を恐れて人を恐れない強さ、どんな非難や攻撃にあっても自己弁護せず、忍耐し、祝福を返していくことのできる強さ、どんな時にも正義と真理と愛に裏打ちされた行動をとることのできる強さ、謙遜であり続ける強さです。このような人格的な成長を成し遂げていけるように、神は一歩一歩私たちを導き、私たちを助け、守ってくださるということ覚えていきたい。■

【10/31は宗教改革記念日】

1517年のこの日、マルチン・ルターが「95ケ条の提題」という張り紙をヴィッテンベルク城教会の扉に打ち付けました。カトリックの司祭であり大学教授でもあったルターは、ローマ人の手紙を学び、教える中で、福音の精髄である、信仰義認の教理に引き戻されていました。当時、権力と腐敗、教理的な堕落のただ中にあったカトリック教会がサンピエトロ寺院の建設資金調達のために「免罪符」を人民に売りつけていた状況に対して、ルターは「95ケ条の堤題」で抗議したのです。これらがドイツ語に翻訳され、当時発明されたばかりの「印刷機」で大量にコピーされ、ヨーロッパ全土に生き巡った時に、キリスト教会は反り上がったバネが勢いよく元に戻るようにしてオリジナルの福音に立ち返ったのです。ルターが回復した宗教改革の三つの柱、「聖書のみ」「信仰のみ」「万人祭司」は今に至るまで全てのプロテスタント教会の共通の土台となっているのです。ルター著「キリスト者の自由」を是非御一読を！■